

上海に行つてきた。

11月4日～12日に上海で開かれた「上海国際工業博覧会2003」に出展するためである。当社と法律事務所ホームロイヤーズ（代表・西田研志弁護士）および上海法援コンサルティング会社（上海法援投資諮詢有限公司）が共同で、中国進出に関心を持つ農業関連企業の技術・商品情報を中心紹介する展示を行つた。

中国人参觀者の我々の展示に対する関心は驚くほど高く、日本の技術や農業関連企業に注目する食欲ともいえるビジネスマインドを感じた。

展示会場には今の中中国にとって最大の国威発揚のシンボルである宇宙船「神舟5号」の実物が展示され、先端のIT関連技術や自動車、バイク、バス、鉄道技術からさまざまな分野の技術と企業が、中国の未来を語っていた。中国独自あるいは日米欧との合弁による展示とそれを見つめる人々の姿には、貧しさや社会としての混乱が感じられたとしても、それ以上に自分たちの未来への期待がそこに溢れかえつてゐるようだつた。

その様を見て、ぼくは子供時代であった昭和30年代の日本を思い出した。敗戦国の屈折と空腹感はあつても、未来を予感し“世界に追いつけ追い越せ”と思つていた時代の日本あるいは日本人の姿がそこにダブつて見えた。その時代の日本の子供たちは現代の中国の子供たちと同様に国際見本

江刺の稻

「江刺の稻」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稻。全く管理されていないこの稻が、手をかけて育てた畦の内側の稻より立派な成長を見せていく。「江刺の稻」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

本誌編集長 昆吉則

上海に日本人農業経営者のアンテナショップを作ろう

市に行くことを親にせがんだ。そして、現代の中国人の親たちは——きっとかつての日本の親たちがそうであったように——自分自身より子供たちにこそ未来を示そうとしているのではないだろうか。

現代の日本の人たちは、子供たちに未來を見せる努力をしているだろうか。現在を守ることに汲々とするばかりで、次世代のために未来へチャレンジする努力を放棄しているのではないだろうか。

高層ビルが林立し、至るところで新たなビルや公共施設の建設が進む上海の町並みはかつて手塚治虫の漫画で見た未来都市のようだ。かつて中国を形容する時によくいわれた自転車の群れはもうない。流行のスポーツを歩く若者たちのファッショーンも日本と変わらない。でも、展示会の当社のコマで中国人スタッフ2人の携帯電話が盗まれ、1年間の中国駐在経験を持つわ

が社スタッフもホテルの朝食中にパソコンなどを入れたカバンを置引きされてしまった。それも、今の中中国の人が体験していたことと、日本もまだ持ちえていないような“未来”に向けて奮進するような変化を上海の人々は同時に体験しているのかもしれない。この国人々が持つてゐる空腹感や少し乱暴に見える振る舞いは、むしろ人や社会としての健康さでもあるのだ。その中にはいると、むしろ豊かさの中で精神性の成人病症候群に悩み、それゆえの敗北主義に陥っている日本人や日本という國の不甲斐なさを感じるのはぼくだけではないだろう。

変化が急であればこそ、当然のことながら様々な矛盾が存在するだろう。でも、我々が泥棒に会うのも、現代の日本人の感覚からすればギョッとさせられる光景に出でた。東京オリンピック前の日本のタクシーは“神風タクシー”と呼ばれてヒンシュク

が社スタッフもホテルの朝食中にパソコンなどを入れたカバンを置引きされてしまった。それも、今の中中国の人が体験していたことと、日本もまだ持ちえていないような“未来”に向けて奮進するような変化を上海の人々は同時に体験しているのかもしれない。この国人々が持つてゐる空腹感や少し乱暴に見える振る舞いは、むしろ人や社会としての健康さでもあるのだ。その中にはいると、むしろ豊かさの中で精神的成長を経験する。そこには、必要とされる場があると考えるべきだ。我々は、その変化を体験してきたからだ。単なる生産技術の移転より、我々の消費体験あるいはそれを保証してきた生産の体験こそが肝心なのである。農業を含め時代は終わり、新しい日中の関係が始まろうとしているのだ。

今回の短期間の上海旅行で、上海に読者の農産物を販売するアンテナショップを作る”という決心をした。それが“メイド・イン・ジャパンからメイド・バイ・ジャパン”へと読者に呼びかける本誌の責任だと考えるからだ。解決せねばならない課題は少なくないが、それを手始めに、中国の求められる市場に向けて、中国国内だけでなく豪州を含めた各地で日本人農業経営者が第二農場の経営を開拓させていく一助

を買うものであつたし、その当時に田舎に行けば、道路際で婆ちゃんが尻を出して用足すのも当たり前の姿だった。

きっと上海でも、ついこの前まで車のクラクションは「ドケーッ！お前らドカンカラ」と、日本もまだ持ちえていないような車たゞだが、今、そんな車はいない。町でタンを吐く人の姿も目立たない。そんな表

現で中国を評して優越感を感じる日本人こそ彼らに追い越されるのだ。

でも、こんな上海あるいは中国であればこそ、そして我々農業関係者であればこそ、そこで必要とされる場があると考えるべきだ。我々は、その変化を体験してきたからだ。単なる生産技術の移転より、我々の消費体験あるいはそれを保証してきた生産の体験こそが肝心なのである。農業を含めて、安い労働力を期待する“開発輸入”的時代は終わり、新しい日中の関係が始まろうとしているのだ。